2月の学習会の案内

平成２７年２月１８日

気付けば、２月もあっというまに後半に突入しています。この１年間もあっという間でした。きっと同じように感じられている先生方も多いのではないでしょうか。

さて、先日は附属小学校の実践発表会でしたが、おかげさまで４００名を越える先生方にご参会いただき盛況に会を開催することができました。本会の会員の先生方におかれましても多くの先生方にご参観いただきました。この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

今回は、低学年（小野）と中・高学年（小出・難波）の二つに分かれて授業協議を行いました。中・高学年の協議会では、それぞれの授業がグループ活動を主体にしていたこともあり、協議会の中でもグループ協議の時間を長く取るようにしました。今までの協議会では、発言される先生と控えめにされる先生との間で一方通行感がどうしてもあったのですが、今回はグループの時間を多くすることで、どの先生にも考えられていることをしっかりと出していただけたのではないかと思います。授業の改善については、当然提案していくべき内容ですが、協議会の形態についても今後は、多くの先生方のご意見が出てさらに建設的な会となるように工夫していきたいと思います。

本題の語る会ですが、下記のように開催いたします。いつもながらご案内が遅くなり申し訳ありません。３次の授業形態としてワールド・カフェという新しい可能性を探った授業実践について難波先生に発表してもらいます。お忙しい時期かとは思いますが、多くの先生方にご参加いただければと思います。

日　時　　平成２７年２月２８日（土）９：３０～１２：００
場　所　　岡山大学教師教育開発センター　東山ブランチ２F 授業研究室
　　TEL(086)272－0511　　FAX(086)271-3455
連絡先　　小出　真規（こいで　まさき）TEL　090-5704-7339
　　m-koide@okayama-u.ac.jp（学校パソコン）
　　m-koi.freewill.ns.io@docomo.ne.jp（携帯メール）
内　容　　難波香織先生（附属小学校）の実践発表
　　（天気を予想する　光村図書５年　「十秒」が命を守る　三省堂５年）
　　ワールド・カフェ形式の授業を３次で行った実践の発表です。
＜お知らせ＞
※　駐車場について
　東山ブランチの駐車場をお使いください。

1月の学習会の報告

１月の語る会は，小出より、「着るロボットを作る」（東京書籍４年）の実践について、秋の附属小学校の研究会での実践について報告いたしました。司会と発表と記録という立場でしたので、一部、恒例の部分の記録が抜けています。ご了承ください。

文責　小出

グループ協議からの記録です。

１グループ

１つ目

メタ認知という点で何をこの文章でおとしていくのか。整理しないと難しい。

事例と意見の区別　妥当だね、納得かなという読み方、機能と活用の因果関係　写真と本文のつながりなどの読み方など、感動がなく読み方だけに落ちると納得ができきれないのではないか。

２つ目

インタビューと説明文という配列の妙をどうとらえるか。説明文だけで読むと、筆者の思いは浅い。インタビューを読むと小林さんの願いが子どもの中にぐっと入ってくる。最初書かせた自分の夢のロボットと小林さんのギャップ、ものの捕らえ方の差は大きい。

３次の出口。自分でもう一回夢のロボットを書くのは難しい。もっと調べてみたい。素晴らしさを伝えるものを書く方向性もあったか。

３つ目

新たな問い場面。「納得できるか」は、使いやすい切り返しではある。もうちょっと書いてくれたらということには気付くことができるが本当に深まるか。いつも使えるか。

インタビューのところを活用できたらいいかなという意見が出た。

２グループ

ラベリングについて

いつも使えるラベリングと教材独自のものがある。子どもたちが使えるようになっていくのか。１年生でも使える。それを積み重ねていくことが大切。発達段階に応じて無理なくしていくことが大切。

本時の内容面について

形式ばかり読ませていくのではなく、内容面も大切。年間を通して計画していくことが大切。子どもたちはつながるという言葉は使うが、その中身が本当に理解できているのか。つながりの本質が身に付いているか。

焦点化について

筆者の主題について納得かということにしていかないと、子どもの考えは上滑りしてしまう。一文だけを取り上げて本当にそうかと問うても、筆者の主張とずれていたら、子どもが表面的に考えてしまうことになるのではないか。

赤木先生より

読み方というものを子どもが意識しながら読んでいくということ、方策が自分の中に貯金としてたまっていくことを大事にしていくというは間違いない。学校をあげてできているというのは力になっていく。研究授業に行っても顕著に現れている。読み方を子どもが意識する、先生が意識する、授業の最後でもそれを意識したまとめをすることが増えている。子どもはつなぐということをよくいってくる。低学年のうちはそれでいいのだと思うが、これとこれをつなぐとこんなことがいえます。でいいのかと思うが、学年が上がると、つなぐとこれこれが読めます、ということになっていく。

姿勢をただしくしてステップをふむとという事実がわかったので、四輪の歩行器を作った。

それを使うと歩けるようになった事例が２つ出てきた。二日間、５分でということは書かれているが、「姿勢をただしく」という部分が説明不足。そこを説明したり、説明不足だなと考えたりする、十分書かれているところ、書かれていないことを意識して読めるなら、つなぐということで読みを作ったということになっていく。

小林さんという研究者に対する読み手としての感動をどんなふうに授業で生かしていくかという点については、初発の感想をどんなふううにもたせたかということが大切になる。もう一時間１次で必要だったのかもしれない。子どもが読んだときに一人の読み手として何を感じたかということは大切。ロボットのすごさと小林さんという夢をもち、それを研究していることがすごいなあ、学年があがると研究者の方へ目が向いてくるはずなので、どこからそう思うのかなということになると感性的な把握をどんな論理で伝えようとしているかということが読めるようになってくる。初発の感想が大切。どんなところに思いをもっているかということが大切になる。文学の授業のときの直観が使える。ロボットでつながっていくのか、読み進めていくと３次にロボットのことを書きたくなるのか。ロボットがどうというより小林さんの方に興味をもって、研究者のことについて書いてある、ものを調べようという学習など、感動からつながっていく活動になっていくのではないか。活動を通して思考を作るということが盛んになってきているが、子どもの意識の流れがきちんとつながっていくことがとても大切。１次、２次、３次のつながりは吟味をして考えていく必要がある。

田中先生より

批判読みという点について

２つの文章を含めてだが、どんなことが導き出されたら批判読みになるかということに目を向けたい。情報不足のところはよくいう批判読みではある。それは部分に関する批判読み。大元のところは、この二つの文章を通して何を伝えようとしているのかそれを検証するということが批判読みになる。インタビューから本文という順番も考えないといけない。そうなると４年生としてふさわしいのか。子どもにさせる前に教師が本当に批判読みができるのかということがまずある。教科書の教材としては、この順番になっているが、本当にこの順番でいいのか。ということを批判読みを持ち込む教師は考えないといけない。教科書の配列順は子どもに「どんなロボットかな」という思考を促す順番。もう一つは、批判的読みの大きな部分は、書き手は何を伝えようとしているか、どういうふうに伝えようとしているのかということ。４年生くらいから出てき始める。一つの観点にはなっていく。それをこの教材で見ていくと、配列を逆転させて、小林さんにインタビューするとしたら、どんなことを聞いてみたい？といくとどうして開発は？今までどんなちがいがあるの？といった同じことが出てくる。ロボットとはそもそもなんですかという問いは難しいだろう。後の方に出てくる質問は比較的追求していくと、出てくるのではないか。小林さんがどういう思いで着るロボットを作っていっているのかという理解を深めていくことができるのではないか。

単元を貫く言語活動というのは構えを作って授業をしていると受け止めて話をしてきているが、もう一つの形としての読む書く、読む話し合うという形の多様化をもってきているがために、意識の流れをつなぐということがおろそかになってきている。生活を豊かにするということがゴールにある。そのためには、読むなら読むという部分が充実していかないのに書く活動へ急いでも結局は充実しない。活動の複合化に向かいすぎている中で、読むとはどういうことか、読むということの必要性を見直していくことが必要。方略の獲得がないと教科の学習として成立しない。目的との関係性で方略を身に付けさせていく必要がある。最終目的は人々の幸福のため。そのためにどんな読む能力があるのか。集団で読んでいくということ社会構成主義、他者の考えから自分の考えが変わっていくという学習観。単独の教材があってそれに活動をぽんとつける。そんなアプローチではだめで、今回のような発想（東京書籍）は成果をあげている。だからこそ入れ替えという発想も出てくる。目的を明確にしてその中に方略をもっていこうとする研究の方向性はこれから深まっていくのではないか。

以上